

密教における人間存在

奥山直司

宗教における人間観が宗教的な実在観や世界観、さらにそれらに基づく実践と深く結びついていることは改めて言うまでもない。宗教の世界で聖なる実在と向かい合っているのは人間だからである。実在との関係は宗教における人間理解の要の一つであり、人間存在は神的存在との関係において規定されると考えられる。本稿では、仏と人間の関係性を軸に、密教から見た人間とは如何なるものであるのか、について検討を加える。なお仏教の場合、この種の議論では、人間というよりはむしろ有情（衆生）が問題とされるのであるが、発心、修行、得道と進んでゆくのは原則として人間であるから、有情観を人間観に置き換えても差し当たって問題はないと思われる（Cf. 高崎直道「唯識・如来蔵思想の人間観」、前田専学編『東洋における人間観——インド思想と仏教を中心として——』東京大学出版会、1987年、p. 336）。

羽田野伯猷博士は、「Tantric Buddhism における人間存在」において、『秘密集会タントラ』聖者父子流の生起次第『ピンディークリタ・サーダナ』（Piṇḍikṛtasādhana / Piṇḍikrama 成就法略集）の構造分析に基づいて、インド後期密教（タントラ仏教）の瞑想・儀礼に顕れた仏（神的存在）と人間との関係を次のようにまとめている（『チベット・インド学集成』第3巻、インド篇Ⅰ、法藏館、1987年、p. 162）。

要するに、有情世間はもとより器世間もまた、本来神的存在でなければならぬ。人間存在は、仏を父母として、三世の諸仏を本体として入胎し、仏なる栄養に養われて出生するや、身語心の三業において仏と不可分一体であり、その身体の構造機能素材はすべて仏を本性とし、仏を飲食として食する。その死するや法身、中有は受用身、その生まれるや化

身として、仏と不可分一体なる神的存在でなければならない。人間は神に奉仕すべき奴隷ではない。仏に額づくのも、人間が自己自身に額づくことなのである。人間存在は神的存在と本質的に円融する。ところで、有神論的、多神論的ではあるが、タントラ仏教は、形而上学的な神の問題を本質的な問題として探求するのではない。いわゆる神々は、不了義、世俗、māyā の世界の問題である。内向的な自己探求が問題なのである。かくて、究極の原理として心、菩提心に到達する。一切は菩提心の一心に帰着する。そして、これもまた勝義空・prabhāsvara に帰する。

羽田野博士は、このような理解を「humanism の立場」と呼んでいる。この場合のヒューマニズムとは、宗教における人間尊重の精神、人間性重視の精神を意味するものと考えられる。

本稿の目的は、密教に属する諸伝統に共通する人間観があるとすれば、それはどのようなものかを考えることである。しかし、時代と地域と相承系譜を異にして複雑多岐に展開した密教の全体像を視野に入れて語るのは発表者の手には余ることである。そこで、上記のような羽田野博士の解釈を糸口として、インド後期密教に対する考察から始めて、その対象を密教（真言大乘）一般に広げると共に、近現代の諸家の見解を合わせ検討することを通じて、この問題を考えてみたい。

キーワード 密教、人間存在、神的存在